

トレンドを
振り返る

回顧・『アジ研ニュース』のころ

大岩川 嫩

『ワールド・トレンド』の前身ともいふべき『アジ研ニュース』の創刊は、一九八〇年の七月のことであった。研究所はその年創立二〇周年を迎え、人材養成の充実・研究活動の発展期にあたりその成熟度を深めていたが、海外での認知度に比して、国内での知名度は必ずしも高くはなかった。それは、地道な基礎研究機関としてもっぱら学術的な研究に努力を傾注してきた反面、広く一般社会に知られるための広報活動にはあまりにも不器用、悪く言えば無頓着であったからともいえる。その危機意識がこの新しい広報誌の創刊となった。

創刊された『アジ研ニュース』はページ数もすくなく、本文はザラ紙にタイプ印刷という極めて質素なものであった。主要な記事は月例講演会の速記起しと、研究所

の出版物や行事の簡単な紹介、在外職員の現地便りなどで埋められ、それなりに光るものであった。その地味な体裁とあいまって読者をひきつける新鮮な訴求力はいまひとつであったといえよう。この形での『アジ研ニュース』は、ほぼ二年間、二五号（一九八二年八月号）まで続けられた。

広報課の片手間仕事を脱してさらに充実をはかる必要性に促され、体裁も内容も一新すべくいくばくの予算措置が講じられることになったのは二六号からのことである。そして、それまで十数年も国際交流部門で在外職員関係の業務を担当していた私が広報部長直属の専任編集を命じられて広報部へ移動することになったのである。どうやら、私の一九六三年の入所は編集職公募に依じてのことであったのを、人事当局が二〇

年ぶりに思い出し出してくれたらしかった。

そのようなわけで、私が実際に関与して回顧することのできる『アジ研ニュース』は、一九八三年九月発行の二六号からのものである。そして、定年退職を控えて私が最後に編集を手がけたのは、九三年八月発行の第一四六号であった。満一年間、一二〇冊の制作を担当したわけである。なお、『ニュース』はまださらに九五年三月の一五六号まで後任の岩佐佳英氏編集のもとに発行を続けるが、九五年から新しい予算がつき飛躍的に規模を拡大した『ワールド・トレンド』に広報誌としての役割を引き継ぎ、その使命を終えた。

さて、『アジ研ニュース』の話に戻ると、現『ワールド・トレンド』の華麗さには比すべくもない

が、新しいその体裁は、従来のタイプ印刷に変わる写植印刷、紙質も上質紙となり、モノクロながら写真も多用することができるといふものとなり、こうして一新した面目にふさわしく毎号斬新な企画を立てることが求められた。その企画を任せられた編集担当者としては、B5判三二ページ建てという限られたスペースとつましい予算での工夫にあたって、いくつかの原則を考えてみた。アジ研の研究成果と蓄積を広く一般社会に親しみやすい形で提供するという目的を前提として、①執筆者はできるだけ所内の人材によること、②研究所の当面取り組んでいるプロジェクトの目標やその成果をわかりやすく提示すること、③多様な対象途上国の現状や問題点に一般の関心を惹くようにすること、④研究者の「顔の見える」記事を心がけること、等をさしあたりの目標とした。

メインのページは、限られたスペースをインパクトのある内容とするにはテーマを集中的にしぼった特集方式にすることが効果的であり、漫然と雑多なあり合わせの記事で埋めることはできるだけ避けたいと考えた。特集テーマとし



おおいわかわ ふたば

元アジア経済研究所 広報部参事・主幹

ては、地域や国を特定した地域特集、紛争や環境問題などアクチュアリティに富むもの、研究理論や方法上の諸問題等々。種類は多様だが、いずれも研究所のこれまでの蓄積と最新の成果を反映するものであると同時に、開かれたアジア研として社会や研究界の関心にも応えうるものであることを心がけた。なお特集を組むにあたっては、それぞれのテーマに最も関心の深い研究者にまとも役をお願いして、できるだけ多くの所内の人材に世代・部室の枠を超えて横断的に参加してもらったことにした。

『アジア研ニュース』は最後まで編集委員会をもたなかったが、柔軟にその都度中心となつて企画に参画してくれる人と相談しながら進めることによつて、「編集委員会」が毎回編成されると同じ効果があつたものと思つている。それに、フットワークを軽くして、小回りがきくという利点もあつた。発足当初は、ともすれば『アジア研ニュース』への執筆は自己の研究課題や

オブリゲーションのほかに余分なサービスを強いられるのではないかと渋い顔をしない

とも限らなかつた研究者たちも、所内外で『アジア研ニュース』の注目度や声価が高まるにつれて、進んで協力してくれるようになってきた。それは、何よりも研究者にとつて、自分の発信した研究成果が「広く読まれる」ことが喜びであることを発見してくれたがためと思われる。

また、雑誌としての継続性と安定感をもたらすためのレギュラー欄連載も重要な要素である。連載記事にはその年度限りのアドホックなものもあつたが、終始変わらなかつたものには、各ページのエッセイ欄「かるちゃあしよつく／日本人の見た外国・外国人のみた日本」をはじめ、「らいぶらりい」欄として毎回図書資料部員ないし統計部員の担当する資料紹介やレファレンスの見開き二ページ、在外職員からの「現地報告」ページがあつた。

さて、一年間の数多い記憶に残る特集企画のなかでも、何と云つても、のちに単行書「アジアを見る眼」シリーズのなかに一連の「くらし」シリーズとして補強再編されることになつた第三世界の生活関連特集はユニークなものである。社会科学者の眼をもつ書

き手が、しかも年単位の現地生活体験に根ざして執筆しているという特色があつた。その一覧は次のとおり。

*「発展途上地域の度量衡（『アジア研ニュース』No.51）」「はかり」と「くらし」—第三世界の度量衡—（『アジアを見る眼』No.70）、

「第三世界の暦と生活（『ニュース』No.65）」「こよみ」と「くらし」—第三世界の労働リズム—（『見る眼』No.73）、「第三世界の住居問題（『ニュース』No.87）」

「『すまい』と「くらし」—第三世界の住居問題—（『見る眼』No.78）、*「第三世界の交通機関（『ニュース』No.98）」「のりもの」と「くらし」—第三世界の交通機

関—（『見る眼』No.80）、*「第三世界の外食産業」（『ニュース』No.120）」「たべものや」と「くらし」—第三世界の外食産業—（『見る眼』No.85）、*「第三世界の日常着」（『ニュース』No.130）」

「『きもの』と「くらし」—第三世界の日常着—（『見る眼』No.88）、*「第三世界の娯楽産業」（『ニュース』No.140）」「あそび」と「くらし」—第三世界の日常着

—（『見る眼』No.88）。このほか、特集から単行書化したものには、

『第三世界の農業政策—保護と財政』（小倉武一監修・小島麗逸編、一九八八年一月）などがあり、また、特集に注目した外部の出版社からの申出を受けて刊行した『第三世界の姓名—人の名前と文化—』（明石書店、一九九四年三月）もある。

まだまだ編集にまつわるさまざまなおもひは、いまも鮮明であるが、与えられた紙幅も尽きたので、いまから一九年前、担当した最後の号の編集後記に「見守り助けてくださった多数の読者・協力者」への感謝の言葉につづけて述べた次の小文の引用をもって締めくくりに代えることを許していただければ幸いである。

「▼「千里の馬は常に有れども、伯樂は常には有らず」（韓愈）……アジア研という沃野には、千里を駆ける名馬にも比すべき多くの才能と知識がひしめいています。その一人ひとりの能力を引き出し、表現してもらい、また時には執筆者自身が必ずしも意識していなかつたテーマを探りあて、その後の研究生活にも生かしてもらつたこと—それが、僭越にもひそかに「伯樂」たらんことを目標としていた私の編集者としての心意気でした」。